

准三宮

りて、才華は禁庭に馨る。寔に是れ釋氏の棟梁にして、佛家の柱礎たり。其の嘉猷を嘉し、其の美功に感じ、豈に崇範を授けざらむや。宜しく三宮に准じて、年官年爵を加へ、封戸三千戸を授くること、一ら舊典に遵ふべし。主者施行せよ。

〔孝明天皇紀〕

第三七詔 時局重大に就き國策三條を群臣に諮詢し給へる詔(文久二年五月十一日)

夷戎猖獗す  
祖宗に恥づ  
幕吏攘夷を  
誓ふ  
和宮御降嫁  
國體に係る  
仰げ

朕惟ふに、方今の時勢、夷戎猖獗を恣にし、幕吏措置を失ひ、天下騒然として、萬民塗炭に墜ちむと欲す。朕、深く之を憂ふ。仰ぎては祖宗に恥ぢ、俯しては蒼生に愧づ。而るに幕吏奏して曰く、近來國民協和せず、是を以て膺懲の師を擧ぐることは、願はくは皇妹を大樹に降嫁せば、則ち公武一和、而して天下力を戮せて、以て夷戎を掃攘せむと。故に其の請ふ所を許す。而も幕吏運署して曰く、十年の内に必ず夷戎を攘はむと。朕、甚だ之を喜び、誠を抽でて神に祈り、以て其の成功を待つ。昨臘和宮の關東に入るや、千種少將・岩倉少將をして、天下大赦の事を諭さしめ、且つ告げて曰く、國政は舊に仍りて大概關東に委す、外夷の事の如きに至りては、則ち我が國の一大重事なり。其の國體に係る者は、咸く朕に問ひて而る後に定め議し、或は二三の外藩臣をして、預め夷戎の所置を聞かしめよと。幕吏對へて曰く、宸意事甚だ

薩・長二藩  
の來奏  
正義地に委  
す

討幕を乞ふ

忠誠憂國の  
情に出づ

大赦

國家傾覆せ  
む

聖賢の遺訓

三事を策す

重大にして、遽に奉行し難し。請ふ暫く猶豫あらむことをと。既にして頃日、列藩謀議を獻る者有り。薩・長二藩の如きは、殊に親しく來りて事を奏す。且つ山陽・南海・西國の忠士、既に蜂起して密奏して云はく、幕吏の奸徒日に多く、正義地に委す而も王家を蔑にし夷戎と睦ぶ。物貨濫出して、國用乏耗し、萬民困弊の極、殆ど夷戎の管轄を受くるに至るや、日ならずして知る可きなり。冀はくは旌旗を擧げて、鸞與を函嶺に奉じ、幕府の奸吏を誅せむと。或は曰く、太平浸潤、游惰の弊を除かむが爲に、京師の奸徒を誅せむと。又曰く、幕府を顧みずして、攘夷の令を五畿・七道の諸藩に下さむと。其の衆議の如きは、畢く忠誠憂國の至情に出づと雖も、事甚だ激烈にして、薩・長の輩に喩して鎮壓せしむ。其の他幕吏久世大和守を召すも、往復に日歴て、未だ唯諾を告げず。而して先づ昨臘諭す所の大赦を行ふ。夫れ大樹猶弱し何の失か之有らむ。但幕吏因循にして安を偷み、撫馭術を失ふ。是の如くならば則ち國家の傾覆、立ちて待つ可きなり。朕、日に憂懼す。所謂一日の安を偷みて、百年の患を忘る、聖賢の遺訓鑑む可し。當に内は文徳を修め、外は武衛を備へて、斷然攘夷の功を建つべし。是に於て衆議を斟酌し、中道を執守して、徳川をして祖先の功業を興し、天下の綱紀を張らしめむと欲す。因りて三事を策す。



其の一

其の一に曰く、大樹をして大小名を率ゐて上洛し、國家を治め夷戎を攘はむことを議し、上は祖神の宸怒を慰め、下は義臣の歸嚮に従ひて、萬民和育の基を啓き、天下をして泰山の安に比せしめむと欲す。

其の二

其の二に曰く、豐太閤の故典に依りて、沿海の大藩五國をして、五大老と稱せしめ、國政を咨決し、夷戎を防禦するの所置を爲さしむれば、則ち環海の武備は、堅固確然として、必ずや攘夷の功有らむ。

其の三

其の三に曰く、一橋刑部卿をして大樹を援け、越前前中將をして大老職に任じて、幕府内外の政を輔佐せしむれば、當に左衽の辱を受けざるべし。此れ萬人の望にして、恐らくは違はざらむ。

三事申一を  
行はしむ

朕が意、此の三事に決す。是を以て使を關東に下す。蓋し幕府をして三事申の一を選びて以て行はしめむと欲するなり。是を以て周く群臣に詢る。群臣忌憚する所無く、各心丹を啓沃して、宜しく讜言を奏すべし。（「孝明天皇紀」）

第三三詔 時局を御軫念御述懷の勅書（文久二年五月十一日）

夷狄の患

それせいじん あらさ 夫聖人ニ非ルヨリ、内安ケレバ 必外ノ患有リト。方今天下二百有餘年、至平二慣レ、内遊惰ニ流レ、外武備ヲ忘レ、甲冑朽廢シ、干戈腐鏽ス。卒然トシテ夷狄之患

幕府の因循

神州陸沈せ

列藩内密上  
言す一身を以て  
天下に易へ  
んや弘安の先蹤  
を繼がん  
幕府條約を  
締ぶ

起テ、不能應レ之。終ニ癸丑（嘉永六年）甲寅（安政元年）ノ年ヨリ、有司益

駕御之術ヲ失シ、事模稜多シ。是ヲ以て、戎虜不レ知所ニ恐懼、求徴無レ屢、條約ヲ定メ、關市ヲ通ゼン事ヲ請フ。幕府因循、不能拒二其請一、以二旗下小吏一奏聽。朕、

知二其詆罔二斥レ之。翌巳年（午の御誤か、安政五年）二月、幕府以二老吏堀田備中守及二三小吏一登京、事情ヲ陳シ、切請不レ止。朕熟案、古今夷狄之憂雖レ不レ少、

近年之如ク甚ハ未レ有レ之也。若一旦親二狎之一、隴流穢漲、神州陸沈シ、朕ガ世ニ至テ、初テ金甌ヲ缺バ、何以先皇在天之靈ニ謝セント、深謀遠慮シ、群臣ニ咨詢ス

ルニ、皆其不可ナル事ヲ白ス。又列藩内密上言之者不レ少。乃幕府ニ命ジ、天下ノ大小名ニ令シ、務テ時宜ヲ陳セシム。然ルニ幕府、命ヲ抗シ、肯テ之ヲ天下ニ傳示セ

ズ。朕、深憂慮シ、未ダ處置スルコト不レ有。於是群臣八十八人、奮然トシテ、奏狀ヲ以テ、朕ガ意ヲ贊ス。又或曰、朕、若幕府之請ニ不レ從バ、必承久・元弘ノ事

ヲ爲ント。然レドモ、朕何ゾ一身ノコトヲ以テ、祖宗ノ天下ニ易ンヤト、卒ニ重テ命ズルニ前令ヲ以シ、次デ幕吏ヲ返ラシム。又使ヲ發シ、幣ヲ三社ニ奉ジ、戎虜國體ヲ汚スコトナク、人民其生ヲ安ゼンコトヲ祈請ス。庶幾ハ弘安ノ先蹤ヲ繼ント。豈圖ランヤ、旬日之間、幕吏、朕命ヲ不レ用、遂ニ條約ヲ定メ、通商ヲ許シ、片紙ヲ以テ奏曰、



正義の士を  
排斥す

勤王の志

天下一心  
戮力神州の正氣  
一橋刑部卿

時勢切迫、不得レ止事也ト。朕、殊ニ其侮慢非禮ヲ怒ト雖モ、未遽ニ是ヲ讓責セズ。三家家門、或ハ大老ヲ召シ、其子細ヲ尋紀セントス。然ルニ尾水越、其餘二三ノ名藩臣ヲ籠居セシメテ、又嘗テ命ヲ奉ゼズ。次デ前將軍薨ゼリ。又忠言スルモノ有リ。曰、嗣子幼若、將軍ニ任ズルコトナク、暫其爲ス所ヲ見テ、而後任レ之ヨト。然ドモ直ニ其職ニ任ジ、其ヲ以テ、其職ヲ盡サシメントス。然ルニ將軍幼若、有司柔懷、朕ガ意ニ稱フ事ヲ不知。嘗テ攘夷ノ念ナク、却テ之ヲ親昵シ、剩ヘ正議之士ヲ排斥ス。朕、其三家三卿等ヲ召セドモ、不來。剩ヘ正議之名藩臣ヲ退隱或ハ禁錮セシメ、其積鬱之餘、激シテ變ヲ生ジ、外夷其虛ニ乘ゼンコトヲ過慮シ、特命ヲ幕府水府ニ下シ、天下ノ大小名、同心合力、幕府ヲ輔佐シ、内奸吏ヲ除キ、諸藩勤王ノ志ヲ慰シ、外貽虜ヲ攘ヒ、各國窺覷ノ念ヲ絶セシメントス。然ルニ皆、朕ガ意ヲ體シ、其命ヲ海内ニ示傳シ、天下一心戮力、徳川ヲ輔佐シ、外夷征殄ノ議ヲ不興、却テ公武不和ノ難ヲ醸シ、朕、深ク之ヲ憂フ。其間事勢紛紛、盡ク言フベキ事難シ。然レドモ其一ニ言フニ、人人以爲ラク、幕府如此衰弱不レ振、戎狄如此猖獗不レ懲。然則外患何時止マン。神州正氣、何時回復セン。人民何時生ヲ安ゼン。是豪傑英雄ノ將ニアラズンバ、治ムルコト不能ト。三家三卿ノ中、一橋刑部卿ハ其

勤王の士を  
縛收す

櫻田門の變

英雄ナルヲ以テ、之ヲシテ其職ニ當ラシメバ、寧ヨク大事ヲ成就セント。是以草莽有志ノ士、其事ニ周旋奔馳スルモノアリ。又其間、奸猾其意ヲ快クセントスルモノアリテ、事多ク朕ガ意ノ如クナラズ。不日ニシテ、間部下總守登京、幕命ヲ以テ、凡テ天下ノ事ヲ論ズル者、一切ニ縛收シテ、之ヲ江戸ニ下シ、次デ四大臣落飾幽居シ、正議ノ士、是ニ於テ盡ク。下總守幕議ヲ白シテ曰、條約押印ノコトハ、先役備中守ノ所爲ニシテ、當役ノ知ル所ニ非ズ。即今條約ヲ返シ、通市ヲ止ムル時ハ、外國ニ不信ヲ傳ヘ、彼ガ怒ヲ激シ、異變不測ニ生ゼン。環海武備未ダ充實セズ、且大奸内ニ在リ。若外患起ラバ、内憂之ニ乗ゼン。然ラバ忽チ天下土崩瓦解、如何トモ爲ベカラザルニ至ルベシ。希ハ幕府ノ申ス所ニ從ヒ、姑ク天下ノ時勢ヲ覽ゼンコトヲ。必不レ經年シテ、戎虜ヲ掃絶シ、神州ノ正氣ヲ回復セント。是以、朕、不得レ止事、枉テ其請ニ任セ、以テ天下ノ時勢ヲ見ル。其後庚申年(萬延元年)三月三日、水府浪士、井伊掃部頭ヲ刺ノ事アリ。其所爲ハ亂暴ニ似タリト雖モ、其所懷中ノ狀書ヲ視テ、其意ヲ察スレバ、深ク外夷ノ跋扈ヲ憤怒シ、幕府ノ失職ヲ死ヲ以テ諫ムルニアリ。是朕ガ嘗テヨリ所憂也。又其後年墨使ヲ刺シ、又東漸寺ノ件、皆其意斯ニ基ツケリ。其餘外夷ノ陸梁ナル、對州ノ事、二個國相増事、兵庫ヨリ陸行、江府ニ至ノ



浪華開商延  
期の術策

降嫁の事、  
朕が意に忍  
びず

天下には代  
へ難し

勇豪の士也

愛むべきの  
士也

事、海岸測量、殿山ヲ借與ノ事等、朕、一一幕府ニ、其然ラザル事ヲ責レドモ、幕吏奏曰、是皆一時ノ權宜ニシテ、浪華開商延期ノ術策ナリト。又奏請曰、外夷ヲ掃殄スルニ、天下一心戮力ニアラズンバ、爲シ難シ。故ニ和宮ヲ以テ將軍ニ尙シ、公武一和ヲ天下ニ表シ、而後戎虜勦絶ニ可レ及也。不然バ、公武ノ間ヲ隔絶セントスルノ奸賊アリテ、外夷拒絶ニ及ビ難シト。朕念フニ、先帝遺腹ノ妹ヲ以テ、百有餘里ノ外ニ嫁シ、而モ古來未曾有之武臣ニ尙センコト、朕が意實ニ忍ビザル所也。然ルニ幕吏切ニ内外ノ事情ヲ陳謝シ、朕が憐ヲ請テ不止。朕モ意ニ忍レズト雖モ、祖宗ノ天下ノ事ニハ代ヘ難シト、意ヲ決シテ其請ヲ許シ、十年ヲ不出、必然外夷掃除ノ事ヲ命ジ、且海内大小名ニ朕意ヲ傳示シ、武備充實セシメントス。幕吏連署奏狀シ、皆朕が命ヲ聽ク。故ニ去冬、和宮入城ノ事ニ及ベリ。然ルニ今春ニ至リ、幕吏安藤對馬守、浪士ノ爲ニ刺サル。是等皆、掃部頭ヲ刺セシ者ト同意ノ者ニシテ、如レ此輩ハ、死ヲ視ルコト歸スルガ如ク、實ニ勇豪ノ士也。嗚呼、此輩ヲシテ、少ク其憤鬱スル所ヲ押ヘシメテ、諭スニ丁寧誠實ノ言ヲ以テシテ、暫ク其勇氣ヲ儲ヘシメ、他日非常ノ變ニ用ヒ、其ヲシテ先鋒タラシメバ、堅ヲ衝キ銳ヲ挫クニ於テ、何ノ難キコトカアランヤ。誠ニ愛ムベキノ士也。然ルヲ幕府、意ヲ斯ニ不レ著、日夜猶其餘黨ヲ索ル。是

將軍拜廟

神州の汚穢  
を洒掃す

公武一和

三大臣の幽  
閉を免す

惟ニ、怨ヲ天下ニ構ヘテ、事ニ於テ益ナク、其本ニ反ラズシテ、只ニ威力ヲ以テ制セントス。是ヲ捕レバ、殃又斯ニ生ジ、天下之變止ム時ナク、終ニ大變ヲ激生スルニ至ラン。是朕ガ深ク憂慮スル所也。聞、翌十六日、將軍拜廟ノ事アリ。有司前日ノ變ヲ以テ、拜廟ノ事ヲ延引セント謂ヘリ。然ルニ將軍、嘗テ拜廟ノコトヲ不レ廢シテ、之ヲ行ヘリト。朕、其寬量ヲ愛シ、因テ思フ。庚申三月以來、九門外ニ守兵ヲ置キ、又關白邸亭ニモ兵士ヲ置、或ハ參廟ニ密密武士ヲ具シテ、非常ニ備フト。是等、朕、深ク憂慮スル所也。因テ又思フニ、往年三社ニ奉幣セシ以來、神州ノ汚穢ヲ洒掃センコトヲ朝夕禱請シテ、又法樂ヲモ、至レ今猶之ヲ行フ。庶幾クハ、以テ前ノ志願ヲ全ウシテ、之ヲ終ント。志年云ヲ改メ天下ト與ニ更始ス。公主既ニ尙シ、公武實ニ一和ス。此時ニ迫ンデ、既往ハ咎メザルノ敎ニ由リ、天下ニ大赦シ、三大臣ノ幽閉ヲ免ジ、列藩臣ノ禁錮ヲ赦シ、有志ノ士ノ連座セル者ヲ放ンコトヲ、速告幕府、以テ此舉ヲ行シメヨ。是朕所ニ深欲一也。爾後天下心ヲ合セ、カヲ一ニシ、十年内ヲ限リ、武備充實セシメ、斷然トシテ、夷虜ニ諭スニ利害ヲ以テシ、一切ニ之ヲ謝絶シ、若キ不レ聽、速ニ膺懲之師ヲ舉、海内ノ全力ヲ以テ、入テハ守リ、出テハ制セバ、豈神州ノ元氣ヲ恢復センニ難キコト有ンヤ。若不然シテ、惟ニ因循姑息、舊套ニ從テ



印度の覆轍  
朕斷然とし  
て外夷を親  
征せむ

あらめされば、海内疲弊ノ極、卒ニハ戎虜ノ術中ニ陥リ、坐シナガラ膝ヲ犬羊ニ屈シ、殷鑑  
不レ改、印度ノ覆轍ヲ踏バ、朕、實ニ何以カ先皇在天ノ神靈ニ謝センヤ。若幕府、十  
年内ヲ限りテ、朕ガ命ニ從ヒ、膺懲ノ師ヲ作サズンバ、朕、實ニ斷然トシテ、神武天  
皇神功皇后ノ遺蹤ニ則トリ、公卿百官ト、天下ノ牧伯ヲ帥キテ親征セントス。卿等、  
其斯意ヲ體シテ、以テ朕ニ報ゼンコトヲ計レ。

（「孝明天皇紀」百三十一所收「忠香公手録」）

第三三詔 藤原忠熙に萬機を關白せしめ給ふの詔（文久二年六月）

古に法り道  
を行ふ

才を選び賢を擧ぐるは、明王の嘉猷なり。古に法り道を行ふは、聖人の遺範なり。  
從一位藤原朝臣は朝廷の元首、社稷の重臣にして、股肱の力を竭し、忠貞の節を效せ  
り。夫れ萬機の巨細は、百官總已、皆先づ關白し、然る後に奏下すること、一ら舊  
典の如くせよ。庶はくは博陸の名を揚げて、宜しく至治の政を施すべし。普く天  
下に告げて、朕が意を知らしめよ。主者施行せよ。（「孝明天皇紀」）

至治の政

第三四詔 藤原忠熙に隨身兵仗を賜ふの勅（文久二年六月）

良佐の臣

夫れ天に代りて民を治むるは、人君の行なり。君を導き天に從ふは、人臣の道なり。  
今賢才の人を希みて、爰に良佐の臣を得たり。從一位藤原朝臣は、文質克く諧ひ、令

國の柱石

聞彌高く、實に國の柱石にして、家の棟梁なり。仍りて左右近衛府生各一人、近  
衛各四人を賜ふ。以て隨身・兵仗と爲せ。將に兵仗を禁廷に連ね、式て芳榮を藤門  
に輝かさむ。主者施行せよ。（「孝明天皇紀」）

第三五詔 前内大臣藤原實萬に右大臣を追贈し給ふの宣命（文久二年八月）

朕が良佐

天皇が詔旨らまると、故入道從一位藤原朝臣に詔りたまへと勅命を、聞食さへと宣りた  
まふ。食國の事無きを本として、人民の憂ふるを痛み、寤めても寐ても心を盡し、  
夙に夜に忠を致し思議奏し仕へ奉る。其の志常に厚く其の謀固より深し。寔に  
朕が良佐なりとうれし給ひよろこび給ひし間に、此の昭けき國を去り、彼の冥き國  
に罷りぬ。然して後、年を度り月を経たれども、悲しみ歎き漸漸に増し、歆感ますます  
す添ふ。今功勞を賞し、正直を著さむと所念行す。故れ是を以て、右大臣に上げ賜ひ  
贈り給ふ天皇が勅命を、聞食さへと宣る。（「孝明天皇紀」）

第三六詔 昌仁親王を天台座主に任じ給ふの宣命（文久二年閏八月）

顯密の奥旨  
を窮む

天皇が詔旨らまると、山中の法師等に白さへと宣りたまふ勅命を白さく。入道二品某親  
王（昌仁親王）は、顯密の奥旨を窮め、台家の清規に従へり。固より慈覺大師の門徒  
と爲て、其の職に在るべき隨に、又も往日の重職を授けて、天下泰平に公民和ぎ



を常磐堅磐に、天地と共に久しく、日月と共に明らかに、彌繼繼の御世御世も、國の浦浦の賤民も、安穩泰平に、夜守日守に護り幸へ給へと、恐み恐みも申賜はくと申す。(「孝明天皇紀」)

## 第三六五詔 石清水八幡に外患調伏を祈り給ふの宣命(文久三年三月)

天皇が詔旨らまると、掛けまくも畏き石清水に御座せる八幡大菩薩の廣前に、恐み恐みも申し賜はくと申さく。頻年戎夷等猖獗を恣にして、神國を侵し侮ること罷まざりしが、今亦英夷の兵舶を寄せ來らすとなむ聞食す。其の狀を繹ぬるに、利を貪り隙を覬覦の心情明く著し。依りて許多の軍將を以て沿海を守らしめ、夷賊等が軍爭を壓へ鎮め、皇威を海の外に輝かし、永く夷賊等が侮り覬覦の念を絶たしめむと所念行す。故れ是を以て吉日良辰を擇び定めて、從二位行權中納言源朝臣重胤を差し使して、仕へ奉らしめ賜ふ。掛けまくも畏き大菩薩、此の狀を平けく安けく聞食して、擁護の誓を怠らず守り賜ひ恤み賜ひて、夷狄等が軍艦を來すとも、神威を垂れ賜ひて、激浪を揚げ颶風を起し、攘ひ退け漂ひ沒め給ひて、公民をも千歳の末まで安らかに、勇士は弓を棄にし劍を鞘にして、食國の天下事無く故無く護り賜ひて、寶祚延長に武運悠久に、一天靜謐に萬民快樂に、恤み助け賜へと、恐み恐みも申し賜はくと申す。(「孝明天皇紀」)

も申し賜はくと申す。(「孝明天皇紀」)

## 第三六六詔 石清水臨時祭に外患調伏を祈り給ふの宣命(文久三年三月)

天皇が詔らまると、掛けまくも畏き石清水に御座せる八幡大菩薩の廣前に、恐み恐みも申し賜へと申さく。去し天祿元年より始めて出し奉り給ふうづの御幣を、正四位下行左近衛權少將兼内藏頭藤原朝臣言繩を差し使して捧げ持たしめて、東遊・走馬調へ備へて出し奉り賜ふ。掛けまくも畏き大菩薩、平けく安けく聞食して、天皇朝廷を、實位動ぎ無く常磐堅磐に、夜の守り日の守りに守り幸ひ賜へと、恐み恐みも申し賜はくと申す。

英夷の軍艦

復祭と庭儀

辭別て申さく、近年蠻夷我が皇國を侮り侵し、猖獗を恣にするの心未だ罷まざる間に、今亦英夷の軍艦を來らすとなむ聞食す。其の來れる由を尋ぬるに、猥に許すことの得難きを乞ひ求め、加以、戦闘も發さむの事狀顯然けし。朕が愚昧の招く所と懼れ給ひ危み給ふに依りて、武將を以て海岸に防禦を備へ、彼の逆謀の念を絶ち遠ざけて、六十餘州の外までも、神威を輝かさむと所念す。仍りて復祭の儀は、式月式日に行ひ給ひしが、如斯大患の有るに依りて、神慮は如何にやと恐み給へども、庭儀は、恒の如くに悉備へ行ひ給はず。掛けまくも畏き大菩薩、此



の狀を平けく安けく聞食して、擁護の誓を怠らず、早く冥助を垂れ給ひて、上下は志を齊しくし、皇國は安けく穩に、夷船の來るとも、雨の塵を洗ふが如く、風の雲を吹き拂うが如く、千里の外に攘ひ退け漂ひ沒め給ひて、實位は山と同じく、武運は海と共に、氏氏門までも、動き絶ゆることなく恤み助け給へと、恐み恐みも申し給はくと申す。(「孝明天皇紀」)

## 第三七詔 神武天皇の御陵に外患調伏を祈り給ふの宣命(文久三年三月)

天皇が詔旨らまじ、掛けまくも畏き畝傍山東北陵に、恐み恐みも奏し給はくと奏さく。近年、夷賊等、侮を加へ汚を致す事の罷まざることを、憂ひ給ひ危み給ふ。加復、英國戰艦を寄せ來らし、已に劍戟を動かさむとするの情態著く明けしと聞食す。朕が身に及びて如此殃と有りぬるは、不徳の招く所と、晝とも無く夜とも無く、懼り給ひ危み給ふ。茲に依りて數多の兵備を海岸に設け守らしめ、寇賊を拉ぎ絶たしめて、皇威を遐邇に輝かさむとかへすがへす所念す。故れ是を以て吉日良辰を擇び定めて、官位姓名を差し使して祈み奏し給ふ。此の狀を平けく安けく聞食して、武く嚴しき冥助を以て、弘安の例の如く、速かに醜夷を漂ひ滅し、神州の威徳を顯し、此の如き汚穢を千里の外に攘ひ退け拒み給ひて、天之日嗣の政は平けく

弘安の例

安けく、天地日月と共に、常磐堅磐に護り恤み給へと、恐み恐みも奏し給はくと奏す。

## 第三八詔 神功皇后の御陵に外患調伏を祈り給ふの宣命(文久三年三月)

天皇が詔旨らまじ、掛けまくも畏き狹城盾列陵(狹城盾列池上陵のこと、神功皇后御陵)に、恐み恐みも奏し給はくと奏さく。近年、夷賊等、侮を加へ汚を致す事の罷まざることを憂ひ給ひ危み給ひて、食終へ給ふ間も忘れ給はず。然るに亦、英夷兵船を來らすとなむ。其の由を尋ぬるに、請ふ所の事情、猥に許し難し。加之、干戈を將に動かさむとするの逆謀顯然し。誠に我國、危急存亡の時なり。朕が身に及びて、如此殃の有るは、不徳の招く所と深く懼り危み給ふ。茲に依りて數多の武將を以て、海岸を警備せしめ給ひ、彼が禮無く逆るに禦ぎ守らしめ、皇州の神徳を八荒の表に輝かし、醜夷の殃を絶たしめむと所念す。故れ是を以て吉日良辰を擇び定めて、官位姓名を差し使して、祈み請ひ給ふ。此の狀を平けく安けく聞食して、往昔、海に航し西を征たしめ給ひし時の武く烈しき餘威を垂れ給ひて、夷俘の戰艦を、寄せ來るとも漂ひ滅し攘ひ退け給ひ、天下躁ぎ驚くこと無く、國內平けく安かに、鎮め護り救ひ助け給ひて、天皇朝廷を彌遠長に、實位動ぎ無

危急存亡の時なり

皇州の神徳

孝明天皇

七九七



く、夜の守り日の守りに護り幸ひ祈み給へと、恐み恐みも奏し給はくと奏す。  
〔孝明天皇紀〕

## 第三九詔 賀茂祭に外患調伏を祈禱し給ふの宣命(文久三年四月)

天皇が御命に坐せ。掛けまくも畏き賀茂の皇大神の廣前に、恐み恐みも申し給はくと申さく。大神の助け給ひ護り給ふに依りて、天皇朝廷は平けく大坐して、食國の天下事無く有る可しと爲てなむ、常も進むうづの大幣を、正五位下行主計頭兼内藏助藤原朝臣義孚に捧げ持たしめて、あれをとこ(男)・あれをとめ(女)・走馬進めらると、恐み恐みも申し給はくと申す。

神州を汚す

辭別て申さく。蠻夷等、神州を汚し侮るの倨驚なる所爲の態を、如何にやせむと憂ひ給ひ危み給ひ、拒絶の謨議を盡し限を定め給ひて、去し三月しも行幸し給ひて、親躬ら歎慮の事情を誓ひ祈り給ふ。然るに其の期も近きに在りぬれど、頃日の形勢なるは、朕、薄徳の致す所か、敬神の心の足らざるかと、茜さす終日も烏玉の狭夜通も、忘れ給ふ時し無く宸襟を惱し給ふ。そもそも皇大神の明き助に有らずむば、斯くの如き殃を、何日か攘はむや。仰ぎ願はくは、國人歸一にして忠に誠の心を盡し、早く攘夷の成功を遂げしめ、皇州の神威を、四海の外に表し、永く夷賊等の

皇州の神威

皇御孫命

覬覦の念を絶たむと所念す。掛けまくも畏き皇大神、此の狀を平けく安けく聞食して、速かに掃ひ却け銷き滅し給ひて、天下躁き驚くこと無く、國內平安に鎮め護り給ひ、皇御孫命の御體を常磐堅磐に守り助け祈み給へと、恐み恐みも申し給はくと申す。  
〔孝明天皇紀〕

## 第三五詔 新たに銅錢を鑄給ふの詔(文久三年四月)

功易を通ずる事、錢より便なるは莫く、子母の輕重、濟ふ所其れ便なり。夫れ貨錢は國の常幣にして、民の必ず要するものなり。足らざれば則ち百貨行れず、餘有れば則ち諸物踊貴す。故に多少を權りて盈縮を爲すは、之を要するに國用を給し、民生を濟ふ所以なり。和銅以來、錢幣屢改まり、水を銷き火を減じて磨滅せり。方今人民益衆く、貨錢將た乏し。故に新たに銅錢を鑄て、海内に流行せしめ、國に富まざる無く、家に給せざるもの無からしめむと欲するなり。遐邇に布告して、朕が意を知らしめよ。主者施行せよ。〔孝明天皇紀〕

貨幣の盈縮の要

國に不富なく家に不給なからしむ

## 第三五詔 尾張藩主徳川慶勝に賜はれる宸翰沙汰書(文久三年六月十七日)

大樹

攘夷の存意は聊も相立たず、方今天下治亂の堺に押移り、日夜苦心之に過ぎず候。今度大樹歸府の儀に付ても、段々許さざる趣申張候得共、朕が存意は、少しも貫